

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO.18 次代を担う衛生工学者シリーズ スタート1年半の20人



インタビューはハノイ・日越大学でも実施した



日越大学関係者。シリーズには片山（東大・前列中央）、佐藤（立命・後列左）の両准教授も登場

1995～1996年頃の発注額のピーク以来、減少を続けてきた水道の投資的経費は、ここに来てようやく上向きの傾向が見え始めてきた。施設の老朽化と更新の必要性が喧伝されて、さすがにこれ以上やる気を見せない訳にはいかない、ということだろうが、それをけん引しているのは浄水場の更新事業である。地中に埋設されて目に見えない管路については、相変わらず停滞しており、老朽化が誤魔化し様のない浄水場へは手を付け始めたということか。浄水場の更新事業の場合、事業者の仕様に従った単純な指名競争入札ではなく、DBやDBOといった手法によって、総合的に浄水場の更新とその後の維持管理を発注する形態が増えている。

こうした案件は、いわゆるプロポーザル方式と言われる提案案件である。昨今は企業同士の阿吽の呼吸だったり、いわゆる「ガチンコ」だったり、“部分連携”だったり、注目の案件で単純な内容は1つもない時代になっている。提案案件の場合、事業者自身で企業に評価点をつけて選定するというのは稀で、学識者・有識者による「企業選定委員会」を設置し、地元や当該事業体に縁があるエライ先生に選んでもらうという方式をとることが多い。権威をつけ、後々、文句が出ないようにするという狙っているのだろう。

企業選定委員会のメンバーは事前にオープンにされることもあるし、秘匿される場合もある。委員の名前がオープンにされた場合、委員の先生への働きかけは禁止される。技術資料を持って説明に行く、というレベルを超えた行為を取る企業が出ないとも限らないから、そこは公明性・公平性を保った手順を踏むため、接触禁止となる訳である。

一方、企業選定委員会の委員名を開示しなかった場合、秘密になっているのだから企業からの働きかけはないことになる。ところが完全に情報をクローズにできるということは難しい、あるいは、ほぼないと言うことができるのかどうか？企業からの働きかけはない（できない）ことになっているのだから、逆に言えば、表に出なければ、働きかけし放題

ともいえる。委員の名はオープンが適切なのかクローズが正しいのか、どちらが適切なのか難しいところではある。

ある日、ある企業から委員会の委員を務めるような大学の先生にコンタクトする旨い方法はないだろうか、という相談が来た。単純には、「紹介して欲しい。できれば会食も」というわけだ。酒食に意地汚い私の軽薄な人間性を見透かした提案で、提案者としては上手いところを突いたと思ったのだろうが、少し、甘い。紹介するのは良いけれど、「有村はこの企業を応援しています」ということを宣言するに等しいわけで、フリーランスの水道ジャーナリストとしては、それはできない相談である。

では、企業選定委員会を務めるような学識者、即ち、中央・地方を問わず、熱心に活動している若手・中堅学識者をインタビューで取り上げ、それを読んだ者がコンタクトの切っ掛けとしてはどうか？但し、情報はフリーであり、読者は誰でも月刊『コア』に掲載された内容をネタに、学識者にアクセスできる。それでこそ公明正大（は大仰ながら）であり、フリーランスの情報提供者・水道ジャーナリストとして取材成果を水道界に反映できることは、この上ない喜びである。読者が増えることは、ビジネスにつながるわけで、新聞社としてもジャーナリストとしても有難い。

そういう、ある意味、邪悪でスケベな意図でスタートしたインタビューシリーズが、この7月で20回を迎え、若手中堅の学識者を始め、話題にさせていただいていることは、日本設備工業新聞社に対しても読者諸兄に対しても、ご同慶の至りである。

衛生・環境工学にせよ、さらに範囲を狭めて上下水道工学にせよ、そこを専門領域にしている限り、お互いにこの社会に生きる者として、活動を停止するまで（場合によっては死ぬまで）一緒に仕事をすることが、互いの最大のメリットと喜びである。1時間1日1週間の接触が、まったく無駄なく蓄積していく。事業体であれ企業であれ、大きな予算の執行権限を持っている人物（いわゆるエライ人）が、1年2年先には水道から無縁となり、永遠に交わることがない人間となることが分かっているながら、満面の笑みで付き合いを続ける苦痛を思えば、この先も同じ世界で共にビジネスをできる効果と楽しさは、多少の負担など物の数ではない。取材対象者、企画支援企業、読者その他もろもろの皆さんの支援を頂き、1か月間が一瞬で過ぎ去る至福と言える日々を過ごしている。つまり、毎月の締め切りがかなり負担で、常に2か月先を手配していなければ、あっという間に締め切りが来てしまう、という嬉しいボヤキである。スタートから1年半、この9月には、7月まで登場頂いた20人のインタビューを1冊にまとめるという話が進行していることをお伝えしたい。次の20人のインタビューをまとめるのは、1年半後である。